

報 市民リポーターだより
第10回

大館を売り出すためのアイデアは

地域の産業経済は依然として低迷状態が続いています。こうした中で、地域活性化へ向けて、市民みんなで考える「まちづくりシンポジウム」や、新企業の進出、花岡工業団地の造成、「忠犬ハチ公」の映画化など新しい動きが出てきました。そこで、今号では、六人の市民リポーターに「大館を売り出すためのアイデア」を考えていただきました。

俗化していない自然を売り出す

野村 裕 子(川口)

俗化していない観光地を都会の人は望んでいると思います。にぎやかに遊ぶのではなく、一日中読書をするためとか、森林浴をする旅というものを売り出しているのでしょうか。

矢立峠の温泉。一泊だけの旅ではなく、安く、ゆっくりと宿泊できる料金と、都会からの交通機関、交通費、そして自然を旅行ガイドなどで宣伝を。

夏と冬、都会の小、中、高校生の体験旅行を企画。大館は、大きく目立つものはないと思いますが、俗化していない点を堂々と紹介したいと思っています。

「銅」のことですが、「銅板屋根」を全国に売り出したらどうでしょう。か、産地直送の「大館の銅」と「大館の職人」を派遣するというアイデア。大館には人材と原料がそろっているのに、それがみんな外に流出してしまっています。今度は、原料としてではなく、製品加工して完成品として売り出してほしいのです。

鉱山は、マインランド尾去沢を

香母酢と私

山石勝子(東台二丁目)

「香母酢」ユズに似た黄色い果実をすぐ思いうかべる方は、多くはないでしょう。

十年前、大分の知人から送られた香母酢は、いま私の身近にすっかりなじみになりました。九月中旬、四キロ六十個ほどの実が届くと知人におすそ分けします。

大分県は「一村一品運動」の草分けの地であり、昨秋は大分県知事も秋田おこしのシンポジウムに来県しました。

香母酢と共に彼女自身の大分の

学園都市、文化のまちづくり

秦 震(鉄砲場)

不況のまち大館と呼ばれて久しくなりました。

その根源が人にあるとすれば、冒険心と柔軟な思考を持った若者

を地元で育成して還元する「小さな学園都市大館、生きた文化のまち大館」はいかがでしょうか。

地元出身の研究者、技術者の養成、この人たちの輪をひろげて郷土の文化活動にも貢献する、ここに高等教育機関(短大など)の一つの意義があるはず。もちろん現代にありがちな技術に片寄ったエリートではなく、常に日陰に咲く花を忘れることのない、倫理感に裏打ちされた人間であることは言をまちません。

駅周辺の再開発と秋田杉・鉱山の活用を

鬼沢 君子(白沢)

市の活性化のテコ入れとして大館駅周辺の再開発を早急に。

大館駅の構内をもうちょっと整理し、郷土みやげ品売場や観光案内所を設置。さらに朝市もアーケードのある市場にして観光客も買物ができる魅力あるようにしてほしいと思います。

東北夏まつりの期間中、青森ねぶたから秋田竿灯に行く途中の通過点としてばかりでなく、大館でも夏まつり行事をやって観光客を一泊させるようにしたいと思っています。

市の主要産業の一つである木材。この木材(秋田杉)を使って、今ブームのログハウス(丸太造りの家)のキットを販売する。それに駅前国道筋にログハウスのモデルハウスを建ててPRしたらどうでしょうか。また、それを作るログビルダー(建築業者)を養成す

集と活躍の場が設けられます。同一産業に三十年以上日が当たり続けることがないというこの現実の中でも、東、帝人、旭化成などの合組業界が十五年も前から脱繊維をはかり、フィルム、炭素繊維、光ファイバー、人工臓器等に活路を見い出しており、その先見性、洞察力には目を見はらせるものがあります。現状打開のためには危険をおかす勇氣が必要です。中期展望に立って教育機関、即効性から地場産業の挑戦を挙げました。若者や主婦、お年寄りたち、そして生れて来る次の世代のためにも、「山紫に水清き学園都市大館」は見果てぬ夢でありましょうか。

恵まれた美しい自然を生かして

斎藤 久(片山二丁目)

米と、鉱山と、秋田杉のまちといわれた大館市。いまこの三本柱がぐらつきだしている。人口も七万人台を維持できるかどうか心配されている昨今、あれもだめ、これもだめと暗い話ばかりだが、心まで沈下してはならないと